

# 日本近現代文学における王昭君の形象

阿部 泰記

## 一 はじめに

漢の王昭君が匈奴に嫁いだのは元帝の命を受けてのことであり、王昭君や元帝の感情などは『漢書』(82)には記載されていない。

だが三百五十年後に編纂された『後漢書』(432)「南匈奴伝」では、王昭君は「掖庭」で元帝の詔を待つがいつまでも元帝と会えなかったため志願して匈奴に嫁ぎ、元帝はその美貌を見て後悔するが取り消しはできず、王昭君は呼韓邪の死後に帰国を願うが成帝は許さず異母子に嫁ぐと詳細に記載しており、夷狄であった匈奴への降嫁に対する哀惜の情が表されている。

時間軸から見ると、『後漢書』は『琴操』「怨曠思惟歌」、『西京雜記』、「王明君辞」の後に編纂されており、『琴操』では王昭君は匈奴に嫁いだ後に「怨曠思惟歌」を作って悲哀を詠み、単于の死後、異母子に嫁ぐことを拒否して服毒死し、単于が礼葬するとその冢には青草が生えたと述べ、『西京雜記』では王昭君は画工に賄賂を贈らなかったため元帝に会えず匈奴に嫁ぐことになり、怒った元帝は画工毛延寿らを処刑したと記し、「王明君辞」では王昭君が嫁ぐ際に烏孫公主のように馬上で琵琶を弾いて見送ったのではないかといひ、夷狄に嫁ぎたくない心情を歌った新曲を記録している。

そして王昭君故事を伝承した日本では、奈良時代には漢詩、平安時代には和歌・物語、鎌倉時代には軍記物語、室町時代には謡曲、江戸時代には小歌・絵画・川柳、明治時代には小説・薩摩琵琶歌・児童唱歌・新体詩、大正時代には演劇・小説、昭和時代には講談・小説・漫画、平成時代には小説・漫画などの文学・芸術によって表現された。

特に近現代では西洋文化が伝来して女権運動がおこり、女性が自由意志で結婚することが理想とされるようになり、王昭君は伝統の犠牲になった悲劇的な女性として注目されるようになる。そこで本稿では日本における王昭君故事の形象について、明治時代以後の創作を取り上げて考察してみたい。

## 二 讒言を被る

唐李白(701-762)『于闐採花』<sup>1</sup>に「自古妒蛾眉、胡沙埋皓齒」(古より蛾眉を妒み、胡沙は皓齒を埋む)、白居易(772-846)に『過昭君村一村在歸州東北四十里』<sup>2</sup>に「独美衆所嫉、終棄出塞垣」(独美は衆の嫉む所、終に棄てられ塞垣に出づ)、宋曹勛(1098-1174)『昭君怨』四首<sup>3</sup>に「美好招世患、讒諂過忠告」(美好は世患を招き、讒諂は忠告に過ぐ)と言つて、王昭君が美貌で疎まれ讒言を被ったことを詠っており、日本でも藤原成範(1135-1187)が編纂した和歌物語『唐物語』一卷(十二世紀後半)<sup>4</sup>第

<sup>1</sup> 『李太白全集』第四卷、樂府二。

<sup>2</sup> 『白氏長慶集』第十一卷、感傷三。『欽定四庫全書』集部収録。

<sup>3</sup> 『松隱集』第四卷、古樂府。『欽定四庫全書』集部収録。

<sup>4</sup> 小林保治編著『唐物語全釋』(1998、東京：笠間書店)第二十五篇、岩山泰三注釈。

二十五篇「王昭君絵姿を醜く写され胡の王に嫁ぐ語」には「昔、漢の元帝と申す御門おはしましけり。三千人の女御后の中に王昭君と聞こゆる人なん、華やかなることは誰にも優れ給へりけるを、……あまたの御心にいやましく思しけり。……この人は、鏡の影の曇りなきをのみ頼みて、人の心の濁れるを知らず」と述べている。

これらの伝承を受けて、明治時代には、鹿児島県平民の川崎宗太郎編『薩摩琵琶歌』一卷(1886)<sup>5</sup>に収録する『王昭君』(端歌)が、眉欄に『西京雑記』と注記し、王昭君は讒言に遭って胡国へ流されたことを詠み、唐朝は我が国から離れてはいるが、日本人である自分もまた王昭君のように讒言にあつて愛する人との仲を裂かれたと悲しんでいる。

問はず語り、誰聞とてか。打わぶる身の憂さを知れ、山ほととぎす。のきの草、しのおとすれど、秋ふけて、齡ひ果たる虫と我かな。別れには、露も命はをしからぬ。夫一生は風前のともし火、悲み骨髓に通ひて、形ちは憔悴と衰へたり。只何事もいもせの契り、浅きぬのほそきえにしとなり果て、哀れはかなき我身哉。一度君に別れては、終ひに逢ふ事もなし。隔て尽せし千嶮萬水の雲、よもすがら心に掛て思へども、君に遭ふ夜の夢だにもなし。

今世の中に物おもふ身は、我等ばかりとおもへども、昔を傳へ聞く時は、王昭君が古へは、漢の帝の美人にて、御寵愛は類ひなし。……如何なる人の讒言にや、胡國といへる遠國の、夷の朝に流されて痛はしや。王昭君今の別れの悲しさを、馬の上にて琵琶をも弾じ、古郷戀しき哥の曲、さまざまと詠じ給へど、……帝もつひに聞こし召れ、御悲歎の御事にて、……されども綸言汗の如くにて、二度召歸さるる事もなし。是は我朝かれは胡國の夷の朝、……乾坤萬里と隔たれど、物思ふ身は異ならず。……

### 三 結婚の犠牲

周知のように『西京雑記』では画工に賄賂を贈らなかつたために好まぬ匈奴に嫁がざるをえなくなつたと記す。

明治時代には特に自由に結婚ができないことを社会問題として取り上げた文学が出現し、王昭君故事が比喩として引用された。喜田貞吉(1871-1939)<sup>6</sup>の随筆『人身御供と人柱』(1925)<sup>7</sup>では、王昭君を国家の犠牲となつたかわいそうな女性だという。

漢の天子が匈奴の襲撃から免れんが為に歳幣を約し、婦女を送つたというのはすなわちこれである。かの有名な王昭君の故事の如きは、たまたまこれが犠牲となつた可憐なる一つのロマンスにほかならぬのである。

尾崎紅葉(1868-1903)<sup>8</sup>の短編小説『やまと昭君』(1889)三巻<sup>9</sup>では、武士の娘一葉が父母の欲望を満たすために、恋人との結婚をあきらめて、あたかも王昭君が怨みを呑んで嫁いだように、好色な高

<sup>5</sup> 東京：薩摩堂蔵板。国立国会図書館蔵。島津正『江戸以前薩摩琵琶歌』(2000、東京：ペリかん社)第三章「古薩摩琵琶歌集」[三]端歌(五)述懐の歌「王昭君」参照。中村鶴城『琵琶を知る』(2006、東京：出版芸術社)は日本筑前琵琶、薩摩琵琶など各種の琵琶や研究資料を紹介する。

<sup>6</sup> 歴史学者、文学博士。『喜田貞吉著作集』全十四巻(1979-82、東京：平凡社)がある。

<sup>7</sup> 『中央史壇』第十一卷第二号(1925、東京：国史講習会)「生類犠牲研究」所載。礪川全次編『先住民と差別 喜田貞吉歴史民俗学傑作選』(2008、東京：河出書房新社)4「習俗と土俗を遡る」、第249頁。

<sup>8</sup> 本名徳太郎。小説家。硯友社を設立し、『我楽多文庫』を発刊する。代表作品に『二人比丘尼色懺悔』、『多情多恨』、『金色夜叉』等がある。門下生に泉鏡花、田山花袋等著名な作家がいる。

<sup>9</sup> 硯友社『文庫』第19-23号掲載。石橋忍月、内田魯庵に書評がある。

齢の家老に嫁ぐが、若い恋人と密会したと嫉妬されて殺される悲劇を描いている。

壹の巻「思ひも顔も漢宮の時に若かず」は、男の嫉妬をテーマとすることから語り起こし、あたかも王昭君が漢宮を去って容色が衰えたように、一葉もまた家老に嫁いで元気を失ったことを述べる。

七去の巖則にて明文ありて、婦人に此を誠むるはよけれど、男の修身には打捨て構はざるは不審なり。嫉妬ゆゑに一命に及びし婦の例は、昔より数の語草ありて珍らしからねど、男のこれゆへに大事を引起せしを見れば、謹まむこと、あながち婦人のみに限るべからず。

某の藩に卯月平馬とて譜代の家老職。主君の御覚えも目出たき武士。今年五十の坂に近く、……家中に陰れなき好色者。……家中に後妻を求むれど、我娘をと名乗出るものなし。……爰に五十依の娘に「一葉」とて國を傾ける艶顔、……若侍浦浪田鶴彌がいつしか思をかけつ懸けられつ、……いやとは言れぬ家老の所望、親子ほど違ふ年、……親父が榮利に良心を曇らせて、斯く言へむ「御家老職の奥方」。……いたはしや一葉、王昭君の怨を呑むでゆく先は、霜白く草葉黄なる千里の遠きにあらで、裏の肱懸窓から向ふに見ゆる黒堀の内がそれ。

挿絵は平福穂庵（1844-1890）<sup>10</sup>が描き、渡辺南岳（1767-1813）<sup>11</sup>『王昭君出塞図』（右図）中の王昭君像を改めて、鬘を「高島田」に結った日本女性に描いている。



三宅花圃（1869-1943）<sup>12</sup>の短編小説『露のよすが』（1896）<sup>13</sup>では、主人公露子が子爵広橋公子と見合いして成功しないが、絵画を出品して安楽な生活を送るさまを描く。作中では母親にせかされて見合いの準備をする露子を昭君出塞にたとえ、将来誰に嫁ぐかわからず、心中不安であろうと述べている。

そろへたる白襟に領元うるはしくて、いつもの露子のおもかげもなく、おもはゆげにてさしうつむくは、王昭君の恨みのそれならねども、いづくの胡の國にや引かれんと、さすがに安き心地はなきなるべし。

<sup>10</sup> 武藤四郎「平福穂庵と尾崎紅葉 穂庵年譜補遺一硯友社との関わりをめぐって」（1998、秋田北門文学会編『北門文学』）参照。

<sup>11</sup> 江戸時代後期画家。円山応挙の弟子。代表作品に『十二支図』（東京国立博物館蔵）、『鯉図屏風』（黒川古文化研究所蔵）等がある。

<sup>12</sup> 本名三宅龍子。原元老院議員田辺太一の娘。小説家三宅雪嶺の妻。作品に小説『藪鶯』等がある。

<sup>13</sup> 『太陽小説』第一編（1896、東京：博文館）掲載。相原和邦「共同研究報告：太陽と女一創刊期の様相」（1996、国際日本文化研究センター紀要13）参照。国立国会図書館蔵。

巖谷小波（1870-1933）<sup>14</sup>の短編小説『昭君怨』（1896）<sup>15</sup>は、東京の画工である「吾」の叙述を通じて華族の窮乏を描き、家の窮乏を救うために犠牲になる娘を王昭君にたとえている。子爵藤代栄房が保険会社の事業に失敗すると、娘美代子は父の危機を救うため自分を犠牲にして、杉波直臣との婚約を解消して、「新平民の頭領」である大坂の高利貸し赤鍋某に嫁ぐ。

わが敬愛する藤代美代子、一わが花の如く玉の如き美代子は、大阪なる高利貸の大家、赤鍋某が家に嫁ぎぬ。赤鍋とは人も知る、新平民の頭領なり。噫浮世の浪の荒き事よ、可惜夜光の名玉を執て、汚穢の淵の底に沈めれど、されど藤代栄房が、正四位子爵の光を失はず、貴族院議員の譽を奪はれざりしは、實に其玉の沈みたるが為めなりき。……知らず彼の杉波直臣は、今や渤海灣の一隅に在りて、そも何をか夢むらむ。

八瀬不泥の長編小説『恋の白蓮夫人』（1921）<sup>16</sup>は、「東京朝日新聞」と「大阪毎日新聞」に取材して、福岡県筑豊の実業家で炭鉱王の大富豪伊藤伝右衛門（1861-1947）の妻燐子が愛人宮崎龍介（1892-1971）<sup>17</sup>と駆け落ちした事件を取り上げる。自序にはこの事件が重大な社会問題だという。

富の力によってあらゆるものを征服しようとする老いた平民の無学者と才氣あふるるばかりの貴族出の佳人と、新しい知識を有つ青年との、思想感情の衝突から生ずる重大なる社会的事象としてかなりに興味ある問題である。

作品は二十九章から成り、第三章「佳人王昭君」では、唐李白の詩を引用して、白蓮があたかも胡地に売られた王昭君のようだという。

今日漢宮人、明日胡地妻とは唐の詩人が胡地に賣られゆく佳人王昭君の上に同情の涙を注いだ句であった、若うして美しい白蓮の身は王昭君の囚はれ人にも比すべきものであったか。

なお柳原白蓮(1885-1967)は、本名燐子。伯爵柳原前光の娘。九歳で子爵北小路瑞光の養女となり、和歌を学んだ。十三歳で華族女学校に入学し、十五歳で随光の庶子資武と結婚し、退学して出産する。二十歳で離婚し、二十三歳で東洋英和女学校に入学して、佐佐木信綱(1872-1963)が主宰する竹柏会に入門した。二十五歳で伊藤伝右衛門と結婚するが、伝右衛門は好色で、遊郭に通って花柳病を移されたため、夫婦仲は悪くなり、燐子は雅号「白蓮」を使って私生活を竹柏会の機関誌『心の花』に詠った。歌集に『踏絵』（1915）がある。

長谷川時雨の短編小説『柳原燐子(白蓮)』（1936）<sup>18</sup>でも炭鉱王伊藤伝右衛門の妻となった伯爵の娘で文才のある燐子の結婚を「昭君出塞」にたとえている。

藝術の神は嫉妬深いものだという。涙に裂くパンの味を知らない幸福なものには窺い知れない殿堂だという。だが、燐子さんは明治四十四年の春、廿七歳のとき、伯爵母堂とともに別居していた麻布笄町の別邸から、福岡の炭鉱王伊藤傳右衛門氏にとつぐまで、別段文藝に関心はもつ

<sup>14</sup> 本名巖谷季雄。雅号漣山人。貴族院議員巖谷修の第三子。博文館『少年世界』の編纂に従事した。

<sup>15</sup> 『太陽小説』第一編（1896、東京：博文館）掲載。後に『小説ハンモック』（1909、東京：亀井商店書籍部）に『今昭君』と改題して発表した。

<sup>16</sup> 東京：時事出版社刊。

<sup>17</sup> 宮崎滔天（1871-1922）の長子。東京帝国大学在学中に「新人会」を結成し、労働者運動を指揮した。白蓮は戯曲『指曼外道』を機関紙『解放』に発表して龍介と知り合った。

<sup>18</sup> 『近代美人伝』（1936、東京：サイレン社）所載。

ていられなかったようだった。竹柏園<sup>19</sup>に通われたこともあったようだったが、ぬきんでた詠があるとはきかなかった。しかし、その結婚から、燦子さんという美しい女性の存在が世に知られて、物議をも醸した。それは、伝右衛門氏が五十二歳であるということや、無学な鉦夫あがりの成金だなぞということから、胡砂ふく異境に嫁いだ「王昭君」のそのように伝えられ、この結婚には、拾万圓の仕度金が出たと、物質問題までが絡んで、階級差別もまだはなはだしかったころなので、人身御供だとまでいわれ、哀れまれたのだった。(第一章)

稲垣史生(1912-1996)<sup>20</sup>の短編小説『考証武家奇談』(1980)<sup>21</sup>「熊本城昭君の間」では、將軍徳川秀忠が懐柔政策のために大名の娘を養女にして暴君として悪名高い熊本城主加藤忠広に嫁がせる。御用絵師の狩野狂舟は賄賂を受け取って醜悪な娘を美女に描いた。宇都宮城主の蒲生秀行の娘は美女であったが賄賂を贈らなかつたため、醜悪な容貌に描かれ加藤忠広に嫁いだ。身分は正室であったが、人質に他ならず、まさに胡地に赴いた王昭君のようであった。狂舟は大江朝綱の『王昭君』詩<sup>22</sup>を思い浮かべずにはいられなかつたと述べる。

実際、加藤家は五十三万石の大身ではあるが、暴君である上に領国は日本のはずれである。嫁ぐ姫君は正室とはいえ、將軍家の娘として遠い敵国へ送りこまれるのだ。形は妻でも人質にはかならない。まさに中国の哀話一胡地へおもむく王昭君をそのままではないか。狂舟は大江朝綱の詩「王昭君」の一節を思い出さずにはいられない。

なお大塚久『政略結婚と武将の家庭』(1929)<sup>23</sup>自序には、「戦国時代諸英雄の婚姻関係は、その十の八九までは、謂ゆる政略結婚ともいふべきものであった」という。

#### 四 苦節と忍耐

王昭君は厳しい環境の匈奴の地に嫁いだ。日本の近現代文学では異国で苦境に耐える女性の代表として王昭君が取り上げられた。

明治時代には西洋詩の影響を受けて「新体詩」が創作された。相澤英次郎(1862-1948)編『今調唱歌集』(1890)<sup>24</sup>には、佐佐木信綱(1872-1963)<sup>25</sup>「王昭君」七五調四句四段が載せられており、王昭君が美貌を恃んで絵師に賄賂を贈らなかつたため醜悪な容貌に描かれ、胡地に嫁いで憂愁の日を送ったことを詠んでいる。

第一段:

思ひあがりし わがかけも、 やさしきまでに おとろへて、  
うつつ鏡は くもらねど、 心ははるる ときぞなき。

第二段:

<sup>19</sup> 佐佐木信綱が1899年に創立した短歌の結社「竹柏会」は和歌の革新運動を進めた。「竹柏園」は信綱の父弘綱の雅号である。斎藤瀏(1879-1953)、前川佐美雄(1903-1990)、五島茂(1900-2003)、柳原白蓮(1885-1967)、九条武子(1887-1928)、五島美代子(1898-1978)、斎藤史(1909-2002)等の歌人が育った。

<sup>20</sup> 本名稲垣秀忠。時代考証家、歴史小説家。

<sup>21</sup> 東京：時事通信社。

<sup>22</sup> 『和漢朗詠集』大江朝綱「翠黛紅顔錦繡粧、泣尋沙塞出家郷。邊風吹斷秋心緒、隴水流添夜淚行。昭君若贈黃金賂、定是終身奉帝王。」

<sup>23</sup> 東京：雄山閣刊。

<sup>24</sup> 東京：雪洒社。国立国会図書館蔵。

<sup>25</sup> 歌人、国文学者。『佐佐木信綱全集』十卷(1948-1953、東京：六興出版部)等の著作がある。

ひなの住居に おとろへて、 目に見るものも きくものも、  
かはりはてしを そのかみに、 かはらぬものか 月のかげ。

第三段:

藻にすむ虫の われからと<sup>26</sup>、 くいのか千たび くやめども、  
かひなきものの 今更に、 思へばうらめし 繪そらごと<sup>27</sup>。

第四段:

北ふくかぜの 行末も、 南よりくる かりがねも、  
朝な夕なに 身にしみて、 ただこひしきは 都なり。

また国府犀東(1873-1950)<sup>28</sup>撰『~~花~~花柘榴』(1901)<sup>29</sup>では、東洋を代表する詩歌として「王昭君」を位置づけ、七五調四句二聯十六段の長編叙事詩で王昭君の哀史を表現している。

「漢宮」では、宮女が宮殿の奥に住まうと詠む。

未央の宮を 彩どりて、 霞棚引く 七重八重、  
雲井に 栢梁臺は立ち、 蜚廉の神は 天に舞ふ。  
懸棟飛閣 五歩十歩、 輦道複道 空に架し、  
虹は碧瓦の 上を曳く、 誰れ迷宮の 奥を知る。

「宮媛」では、三千の宮女が宮殿の奥で詔を待つと詠む。

花の顔 雲の鬢、 春殿閉ざす 三千姫、  
化粧の膏は 溝に充ち、 脂粉の川を なせしとや。  
艶ある花に 愧じ妬み、 鏡を啓く 玉の匱、  
蛾眉を畫ける 刷毛の痕、 召びます夜をば 數へ待つ。

「四宝宮」では、宮女が漢帝に伺候する「四宝宮」を詠む。

七寶の臥牀 繡几帳、 玉座に眞近く 美を誇り、  
雜寶案を 前に置く、 孔雀の蓆 敷く上に。  
寶の屏風 立て廻はし、 列寶帳を 掛け並べ、  
四つの寶の 宮といふ、 侍べらん姫を 誰とせん。

「繪像」では、三千の宮女が絵師に賄賂を贈るさまを詠む。

姫三千の 繪の形、 典侍を擇ぶ 命せあり、  
繪像を造くる 其價、 十萬金と 申すあり。  
黄金轉化の 力とや、 腐唇に色づく 桃の花、  
蕾新たに 生へしあり、 繪像にやつる 宮仕へ。

「明星」では王昭君が美貌で賄賂を贈らなかつたと詠む。

鬢も理めず 懶しとて、 紅筆取らず つくらはず、  
されど蓮の 香を含み、 秋水出でし 艶の色。  
繪人の巧み 借らずとも、 夕づつよりも 淨き我れ、  
眞の姿を 見そなはせ、 繪圖醜くは かかるとも。

<sup>26</sup> 原文「藻に住む虫のわれから」。「われから」は掛詞で、藻の中に住む割殻虫を指し、同音の「われから」も指す。

<sup>27</sup> 原文「繪そらごと」。容貌を醜く描かれて胡国に嫁ぐことを意味している。

<sup>28</sup> 本名種徳。文章家、漢詩人。内務省、宮内省に勤務し、東京高等学校教授等を歴任する。『犀東文集』、『龍吹鶴語』等の著作がある。

<sup>29</sup> 東京：博文館。国立国会図書館蔵。

「純金」では、その結果漢帝が王昭君の存在を知らなかったと詠む。

日は蔽はれて 萎ぼむ花、 海棠雨の いや暗し。  
 撰みに泄れし 沙の底、 純金光り 透きとほる。  
 泉は玉の 籠に棲み、 鶴羽衣の 恨あり、  
 美人哭して 君知らず、 ほつれ毛撫づる うとましき。

「胡人配」では、漢帝が匈奴に嫁ぐよう王昭君に命じることを詠む。

匈奴の使者は 入観し、 内姫を賜へと 上奏す、  
 帝は親ら 繪を案じ、 醜き一人 選りましぬ。  
 沙漠萬里に とつぎ行け、 勅命下る 内の宮、  
 猛き美人は ためらはず、 胡地へ行くをば 諾ひぬ。

「驚愕」では、漢帝が王昭君の美貌を見て驚くことを詠む。

錦の幔を 打ち廻はし、 朱雀の幟 龍の旗、  
 御階の前に 跪づき、 匈奴の使者は 命を待つ。  
 是れ蓬萊の 織女かも、 是れ藐姑射の 神姫かも、  
 涼しき目には 決意あり、 帝の愕き いかばかり。

「噬臍」では、王昭君が決意して匈奴に嫁ぐことを詠む。

帝は悔しく 思ほせど、 國の信義は 重からめ、  
 一たび行くと 諾ひし、 舌乾かぬを 奈何にせん。  
 帝の勧めは 切なれど、 美人は聞かず 此身こそ、  
 毛よりも輕し 國重し、 繪圖に誤り ありしとも。

「烈女」では、漢帝が絵師を処刑したが、王昭君は考えを改めず匈奴に嫁いだことを詠む。

繪に偽りの ありしとて、 帝の赫怒は 畜ならず、  
 繪人五人は 棄市せらる、 されど美人は 意を枉げず。  
 かよわき腕 馬の背に、 万里都の 暇乞ひ、  
 黄河は天より 奔流し、 胡地に峙立つ 五台嶺。

「漠北」では、王昭君が匈奴に嫁ぐ途中に、初めて荒野を見るさまを詠む。

祁連の山は 帯をなし、 沙漠の天に 連りて、  
 績ぐや霧の 色黄也、 燕支はいづこ 雲迷ふ。  
 駱駝の遊ぶ 大荒野、 穹窿形の 幕の廬、  
 千草の末に 見るも罕れ、 我が居寝るべき 宮是れか。

「琵琶」では、王昭君が馬上に琵琶を弾いて匈奴に嫁ぎ、二度と帰ることはないことを詠む。

一たび去らば 胡地の妻、 都にいつか 還るべき、  
 力なき手に 撥を取る、 馬上の琵琶に 神泣かん。  
 東の海に 出づる月、 甘泉殿の 屋根の棟、  
 空幾たび 照らすとも、 明妃は還らず 玉門關。

「雪花」では、王昭君が沙漠で悲惨な生活を送ることを詠む。

席の如き 雲の片、 銀の花とぶ 燕支山、  
 雪より出でて 雪に入る、 日に漢代の 光なし。  
 雪輪の狂ふ 大沙漠、 狂ふは姫の 心なり、  
 琵琶の絲切れ 撥折れぬ、 凍えて飢えて 我死なん。

「最終」では、王昭君が臨終に漢の宮殿に帰りたいたいと思うことを詠む。

骨立ち疲れし 病む姿、 やつれ顫き 鞍に伏す、

若し漢帝の 見給はば、 哀しみ狂ひ 失せません。  
星懐まじき 目の光、 終りの眸 開き見ん、  
都はいづこ 南をと、 問へど胡人は 語を解せず。

「胡沙」では、王昭君が沙漠に没することを詠む。

生きて蘭麝の 殿に居り、 死して沙漠の 草枕、  
伽羅の香沙に 消え失せて、 盡きせぬ恨 胡地の月。  
駱駝を呼ぶか 蘆の笛、 吹くは匈奴の 牧の子か、  
悲しき歴史 語るべき、 胡沙に蓮歩の 跡もなし。

「青塚」では、王昭君が青冢のみを留めて去ったことを詠む。

天に連なる 大沙場、 白草のみぞ 敷き生ふる、  
明妃の塚の 草の色、 などて青くや 萌え出づる。  
黄沙に白き 霜の跡、 勇士の血には 飽きもせん、  
美人の魂を 留めしより、 沙に艶あり 涙あり。

そして末尾に唐李白(701-762)「王昭君」二首<sup>30</sup>を「昭君怨」詩として掲載し、容貌を醜悪に描かれて胡人に嫁いだ王昭君の悲劇をまとめている。

漢家秦地月、流影照明妃。一上玉關道、天涯去不歸。漢月還從東海出、明妃西嫁無來日。燕支長寒雪作花、蛾眉憔悴沒胡沙。生乏黃金枉圖畫、死留青冢使人嗟。

昭君拂玉鞍、上馬啼紅頰。今日漢宮人、明朝胡地妾。

## 五 忠義の宮女

『漢書』に記載するとおり、近現代においても王昭君が国家を救うために匈奴に嫁いだことにならう行為を称賛する。

大正時代、長谷川時雨『王昭君』二場（筋書）(1913)<sup>31</sup>は、歌舞伎座中村歌右衛門のために創作した演劇である。題名は「王昭君」であるが、場面は日本の足利時代の初期に設定しており、王昭君の境遇と日本の女性の境遇を重ね合わせ、大内義行の侍女昭子が、大内家に勘合印を得させるために、義行の姉弓女の前の言いつけに従って、自分を犠牲にして義行から贈られた琵琶を抱えながら、唐船に乗って北夷に嫁ぐさまを描く。

第一場は、兄大内義澄が昭子の美貌を見て惜しくなり、姉弓女の前に抗議する場面は王昭君故事にならったものである。

日本の美女をくれたらば、勘合印を贈らうといふ約束をしたのを、貴女もおぼえてるよう。

それが今日只今事実になったのである。兼ねて送ってある、繪姿の女と引あはせて、船の都合ですぐゆくといふがそれは困る。

第二場は、昭子が愛する義行のために悲痛な決心をする場面が描かれる。

夷の王の手に、あの唐の使の人から渡されるまでは死ねない。妾の命は大事である。我儘に死ぬ事は出来ない。どんな愁い思ひをもしのんで長らへてゐる。日の本の武士に嘘りをいはせるような所業をしては、大事の義行様の面目にもかかはる、と昭子の面には悲痛の色をかくせぬ。

<sup>30</sup> 『御定全唐詩』第一百六十三卷掲載李白「王昭君」二首。

<sup>31</sup> 『青鞞』第三年第一号(1913、東京：青鞞社)掲載。国立国会図書館蔵。



昭和時代には、昇龍齋貞丈（1889-1931）<sup>32</sup>が講談『金田屋お蘭』（昭和三年、1929）<sup>33</sup>において、赤穂浪士が主君浅野内匠頭長矩（1667-1701）に忠義を尽くして吉良上野介（1641-1703）に復讐した物語を講じ、善兵衛（茅野和助）の妹お雛が和七（倉橋伝介）を愛しながらも、忠義のために上野介の妾となって吉良家の動静を探察するさまを描き、お雛を王昭君にたとえている。

「間者と間者」段には語り手がお雛の苦衷を述べる。

古い譬への「昭君胡地に嫁するの歎き」、忠義の為とは言ひながら、お雛は吉良の側室となりまして、怨み重なる敏苦茶老爺に、尊く淨い身を任せねばならぬ事になりました。

第二次世界大戦が終わり、安田靉彦（1884-1978）<sup>34</sup>も日本画『王昭君』（1947）（左図）<sup>35</sup>、『王昭君』（1959）<sup>36</sup>において、毅然として運命に立ち向かう意思の強い女性を表現しており、それは戦後の女性のイメージと重ね合わせたものだという。<sup>37</sup>



## 六 無垢で清廉

王昭君が絵師に賄賂を贈らなかったことからこの形象が生まれる。前述のように『唐物語』一卷（十二世紀後半）<sup>38</sup>第二十五篇「王昭君繪姿を醜く寫され胡の王に嫁ぐ語」には、「この人は、鏡の影の曇りなきをのみ頼みて、人の心の濁れるを知らず」と述べ、王昭君の心が鏡のように澄んでいたという。近現代もこうした形象が伝承している。

昭和時代には、宮崎靖編『新撰学校劇集』第一高学年用（1943）<sup>39</sup>の谷川仲江「王昭君」が王昭君の清廉さを描いている。絵師毛延寿に贈る賄賂の期限が迫り、盲目の淑蘭は、姉黄如亭が貧乏で賄賂が準備できず、姉と別れて生活するのはできないと考え、姉妹は自殺を思うが、王昭君が九龍珠を与え

<sup>32</sup> 講釈師、東京出身。後に名迹を改め、一龍齋貞丈と名乗った。

<sup>33</sup> 大日本雄弁会講談社『講談全集』第三集、第1143-1208頁掲載。国立国会図書館蔵。

<sup>34</sup> 大正昭和時代の日本画家、歴史画の大家。代表作品に聖徳太子の冥想に取材した『夢殿』（1912、東京国立博物館蔵）、『卑弥呼』（1968、滋賀県立近代美術館蔵）等がある。茨城県近代美術館編『歿後三〇年 安田靉彦展図録』（2009）には『遣唐使』（1900）、『田村将軍』（1903）、『静訣別の図』（1906）、『鴻門会』（1955）、『卑弥呼』等の歴史画を収録するが、『王昭君』は収録していない。

<sup>35</sup> 足立美術館蔵。足立美術館ホームページ掲載コレクション 安田靉彦『王昭君』解説参照。野間清六『日本の絵画』（1953、東京：創元社）口絵（巻頭挿図）第二十四図解説に「王昭君の高貴な容色を描いた」という。

<sup>36</sup> 愛知県小牧市メナード MENARD 美術館。http://museum.menard.co.jp/collection/japanese/yasuda\_yu\_01.html

<sup>37</sup> 注（36）ホームページ説明。

<sup>38</sup> 小林保治編著『唐物語全釋』（1998、東京：笠間書店）第二十五篇、岩山泰三注釈。

<sup>39</sup> 東京：清水書房。国立国会図書館蔵。

て姉妹の窮地を救い、自分は醜く描かれて呼韓邪に嫁ぐ。昭君の弟葉邦鈴は毛延寿を斬ろうとするが、昭君が阻む。淑蘭は王昭君が胡国に嫁いだことを聞くと自殺する。帝は葉邦鈴に命じて毛延寿を捕らえさせ、又黄如亭に命じて王昭君とともに胡国に行かせる。以下は王昭君の科白である。

あの九龍の珠は母さまの形見、吾が身には代へ難い品なれど一可哀さうな姉妹、いいえ、あの二人許りではない。春ともなろうといふのに、この宮廷にはああした人達が幾人あることであらう。二人の少女を救ふのも、母さまの遺言を失はねばならないのも、三千人の不安をのぞく為、吾が身を捨てるに何の悔がありませう。

岡琢郎（1894-1975）<sup>40</sup>の法律逸話集『法窓清話』（1952）<sup>41</sup>では、法律に関する逸話として『王昭君』を掲載する。「匈奴」、「清廉の佳人」、「勅使の接待」、「松の廊下の変」、「松柏の節」、「世を忍ぶ放蕩」、「北野の絵馬」の七段から成り、「清廉の佳人」は『琴操』と『西京雜記』の記事をもとに王昭君の清廉さを述べている。

宮女たちは、いずれも、画工に多大な賄賂を贈って、その歡心を得ようと努めるのであった。しかるに、ここに一人の例外的存在があった。王昭君、名は嬙、この宮女は、実に、絶世の美女であったが、その心ばえも、亦、実に、清く美しい婦人であった。かようなさもしい宮女生活の中にあっても、丁度、泥の中から立っている蓮の花のように、馥郁とした香りをただよわせながら、潔くその心を保って、画工の歡心をかおうとしなかった。これがために、王昭君の姿が、いとも醜く描かれてしまったことはいうまでもない。

「勅使の接待」以下は赤穂浪士の物語である。「北野の絵馬」では、大石内蔵助が北野天満宮で次男大三郎に古代の武士の武勇を描いた絵馬を紹介した時、大三郎が唐土の娘が琵琶を抱いて馬に乗って泣く絵馬を見て尋ねると、内蔵助は王昭君の説話を紹介して、「昭君若贈黄金賂、定是終身奉君王。」<sup>42</sup>と詠み、老法師が王昭君の清廉さを称えた大江朝綱の詩であると付言する。

昭君が画図に写された時、外の宮女の中にも、昭君に劣らない美人が、いか程か、あったことでしょう。しかるに、現在、その名をさえ知っている人はありませぬ。唯、昭君だけが、……その顔かたちのみか、その心までが、正しく美しかった事が、誠に天下の美人とも申すべきで御座いましょう。……それで、江相公も、……昭君の潔白を賞められたので御座います。

## 七 美貌の遊女

王昭君を遊女とする。宮武外骨（1867-1955）<sup>43</sup>『笑ふ女』（別名『売春婦異名集』）（1921）<sup>44</sup>は、中国では王昭君のように側室を「君」と称したことと、日本で遊女が貴族の側室でもあった歴史を考証して、『君とは民に長たる至尊の通称なり』といふが本義なれども、支那にて王昭君など士大夫の妾を君と呼びしより、貴族の嬖妾同様たりし我国古代の遊女を君と称するに至りしなるべし」と王昭

<sup>40</sup> 『日本国憲法講話』（1949、東京：大学書房）、『憲法大綱』（1954、東京：立花書房）等の著作がある。

<sup>41</sup> 東京：立花書房。国立国会図書館蔵。

<sup>42</sup> 大江朝綱「翠黛紅顔錦繡粧、泣尋沙塞出家郷。辺風吹断秋心緒、隴水流添夜淚行。昭君若贈黄金賂、定是終身奉帝王。」（『和漢朗詠集』）

<sup>43</sup> 新聞記者、雑誌編輯。『滑稽新聞』（1901）、『スコブル』（1915）等多くの雑誌、新聞、著作を発行し、言論の自由を確立した。

<sup>44</sup> 1921年、東京：成光館刊。

君を遊女のたとえとするいわれを述べており、実際に江戸時代の小歌『美楊君歌集（1604）』は山城国伏見の里の遊女小柳を王昭君にたとえ、歌舞伎『傾城王昭君』（1698）は遊女花月が美貌ながら花会に招待されなかったことを王昭君が漢帝に召されなかったことにたとえている。

昭和時代に至り、長谷川時雨の短編小説『モルガンお雪』（1937）<sup>45</sup>は、アメリカの富豪ジョージ・モルガンに嫁ぐ京都祇園の芸者お雪（1881-1963）に取材しており、第二章には、それを形容して王昭君が胡北へ嫁ぐようだったという。

三十七年一月、横浜の米国領事館で、めでたく、お雪はモルガン夫人となり、アメリカの人となった。新聞は、華燭の典を挙げたと報じ、米国トラスト大王の倅モルガン氏は、その恋花嫁のお雪夫人をつれて、昨日の午前九時五十二分新橋着の列車で横浜から上京したと書いているが、横浜のグランドホテルから東京の帝国ホテルへ移った時のことだ。花婿は黒山高帽子に毛皮の襟の付きたる外套を着して、喜色満面に溢れていたるに引きかえ、花嫁はそれと正反対、紺色の吾妻コートに白の肩掛、髪も結ばず束のままの、鬢のほつれ毛青褪めた頬を撫で、梨花一枝雨を帯びたる風情にて、汽車を出でて、婿君に手を引かれて歩く足さえ捗どらず、雪駄ばかりはチャラチャラと勇ましけれど、顔のみは浮き立たぬ体に見えたり。と書いている。一等待合室に入って、お供の男女がチャホヤしても、始終俯向きがちなので婿どのが頻りに氣を揉んでいたが、帝国ホテルから迎いの馬車がくると新夫婦は同乗して去ったと、胡北へ送らるる王昭君のようだとまで形容してあるが、これは幾分誇張かもしれない。

小野清子（倉田啓明<sup>46</sup>）の演劇『本朝王昭君』（1921）<sup>47</sup>は、寛永時代に烏丸光広卿（1579-1638）が遊女八千代太夫（1635-1658）の肖像画を明朝の文士李湘山に贈ると、湘山は八千代太夫を要求し、光広卿は食言がかなわず、八千代太夫を李湘山に贈る。八千代太夫は王昭君の故事を引用して日本に帰るまいと決心する。八千代はいう、

嘘と誠の間に一生を送るが、うかれ女の習ひとは云ひながら、日本の女の誇、ましてこなさんは榮ある御身をもって、一旦の約束をたがへては、異國人に日本人はいつはりものぢゃとさげすまれ、笑はれて、烏丸光広のお名も汚れませう。わたしとても同じこと、八千代の名が惜まれてならぬゆゑ、あたら百年の戀を棄て、名に生きるこの胸の内を推察して、二人が戀はあの生にもこの生にもないものとあきらめ、わたしを彼の國へやっってください。……胡の地へ送られた王昭君の故事ではござんせぬが、再び日本の地を履むまいと覺悟を極めたこの八千代が心中、あなたも察して下さいませ。

なお李湘山については、遊女評判記の藤本箕山『色道大鑑』（1678）<sup>48</sup>卷十七「扶桑烈女伝 雒陽 吉野伝」に、吉野太夫の素性について述べた後、李湘山が夢に吉野に逢い、その求めによって絵姿が贈られたことを記す。

吉野、諱徳子。……慶長十一年丙午（1606）三月三日生洛陽大佛。自七歳之秋、被養林氏與次兵衛之家。……元和五年己未（1619）五月五日出世而補太夫職（于時徳子歳十四）。……有大

<sup>45</sup> 初出 1937 年、東京朝日新聞。『新編近代美人伝』下（1985、東京：岩波書店）収録。佐伯順子『明治<美人>論』（2012、東京：NHK 出版）、第 27-29 頁。

<sup>46</sup> 本名倉田潔（1892 頃-卒年不詳）。劇作家、小説家。研友社小説家北島春石の食客。春石の妻小野清子に固くして本作品を発表。

<sup>47</sup> 『万朝報』、大正十年（1921）五月八日、旧劇一等当選作品。国立国会図書館蔵。

<sup>48</sup> 朝倉治彦監修『燕石十種』「吉野伝」（1980、東京：中央公論社）、第 305 頁。

明国吳興李湘山者、夢中會吉野、而通言慕這幽容、而以寛永四年丁卯（1627）秋八月、賦詩而送扶桑。……又翌年、自漢土請德子之壽像。我朝之遊客議焉、而命畫工令圖之、跪德子之目前而寫佳貌。畫工尊其輝相、不採毛延壽之例。時圖畫之處七影、不違顔色、恰如移影鏡、悉附軸為七幅、而遣九州。異朝商人代之綾羅、而歡喜夥、況於倭人乎。

また『燕石十種』第六卷『吉野伝』<sup>49</sup>にも、京都林与次兵衛家第二代吉野としてこの記事引用している。『本朝王昭君』はこの吉野太夫の故事に取材した作品であろう。

長谷川時雨『明治美人伝』（1921）<sup>50</sup>では、遊女は時代を代表する女性だと言っている。

徳川期では、吉原や島原の廓が社交場であり、遊女が、上流の風俗をまねて更に派手やかであり、そして、女としての教養もあって、その代表者たちにより、時代の女として見られた。それに次いで、明治期は、芸者美が代表していたといえる。貴婦人の社交も広まり、女子擡頭の気運は盛んになったとはいえ、そしてまた、女学生スタイルが、追々に花柳界人の跳梁を駆逐したとはいえ、それは、大正の今日にかかる棧であって、明治年間ほど芸妓の跋扈したことはあるまい。恰度前代の社交が吉原であったように、明治の政府と政商との会合は多く新橋、赤坂辺の、花柳明暗の地に集まったからでもあろう。芸妓の鼻息はあらくなくて、真面目な子女は眼下に見下され、要路の顯官貴紳、紳商は友達のように見なされた。そして誰氏の夫人、彼氏の夫人、歴々たる人々の正夫人が芸妓上りであって、遠き昔はいうまでもなく、昨日まで幕府の役人では小旗本といえど、そうした身柄のものは正夫人とは許されなかったのに、一躍して、雲井に近きあたりまで出入することの出来る立身出世一玉の輿の風潮にさそわれて、家憲厳しかった家までが、下々では一種の見得のようにそうした家業柄の者を、いきなり家庭の主婦として得々としていた—これは中堅家庭の道德の乱れた源となった。

佐伯順子『明治<美人>論』（2012）「芸能人としての芸者」<sup>51</sup>でも、「遊女」を芸能人として位置づけている。

そもそも芸者とは、文字どおり、三味線等の「芸能をする者」として、江戸時代半ばになって、登場した職業である。花柳界では、いわゆるお座敷遊びとして、芸者の日本舞踊や音曲を鑑賞する習慣がいまでも残されているが、歴史上、遊興空間での歌舞音曲は、江戸時代半ばまでは遊女がつとめていたものであった。「遊芸」という表現があるように、遊女の「遊」という言葉は、古くは「芸能」という意味をもっており、一流の遊女は琴、三味線、舞踊といった芸能百般にたけた、今日でいう“タレント”であり、芸能人であった。

## 八 自由の追求

<sup>49</sup> 『色道大鑑』第十七卷（2006、東京：八木書店）、第 611-612 頁。澤田ふじ子『女人絵巻』（2004、東京：徳間文庫）「吉野太夫—清貧の人」、第 191-202 頁参照。

<sup>50</sup> 初出『解放 明治文化の研究特別号』（1921、東京：解放社）。三上于菟吉編『長谷川時雨全集』（1932、東京：日本文林社）第三卷『近代美人伝』序、第 8 頁。杉本苑子編『新編近代美人伝』上（1985、東京：岩波書店）。岩橋邦枝『評伝長谷川時雨』（1993、東京：筑摩書房）、第 206-212 頁。尾形明子編『長谷川時雨作品集』（2009、東京：藤原書店）第一章「近代美人伝」、「明治美人伝」、第 70 頁。尾形明子『女人芸術の世界—長谷川時雨とその周辺』（1980、東京：ドメス出版）参照。

<sup>51</sup> 東京：NHK 出版、第 22-23 頁。

『後漢書』にある王昭君は進んで胡地へ嫁いだとする叙述が日本にも伝わった。

昭和時代には、米田祐太郎（1891-卒年不詳）<sup>52</sup>の短編小説『王昭君』（1928）<sup>53</sup>は王昭君が女性として後宮の地獄を抜け出して自分が理想とする天地に向かったと述べる。物語は三章から成る。

一 王穰は女婿を選ぶことに執心したため、誰も候補となる人物を推薦しなかった。その時、漢元帝が好色で、良家の婦女を選んで宮女とする話が伝わり、王穰は王昭君を伴って帰州城へ行き、百数十人の娘たちと上京した。元帝は宮女が多すぎたため意見を求めると、宦官が画工に肖像画を描かせるのが良いというので、毛延寿等に肖像画を描かせた。宦官は画工に賄賂を贈るよう王昭君に求めたが、王昭君は即座に拒絶した。

二 元帝は王昭君の肖像が気に入ったが、宦官はその両頬に三個の黒い痣があり、人相術では夫を剋する不吉な痣だと上奏したため、元帝は肖像画を見ようとしなかった。王昭君の同郷の宮女張淑貞は同情したが、王昭君は気にもせず、かえってこれからの宮廷生活を憂慮した。半年がたち、匈奴の酋長大単于が使者に黄金百斤、白璧十双を届けさせて閼氏とする宮女を求めたが、当時匈奴は野蛮な国民だとさげすまれていたため、宮女は誰も嫁ごうとはしなかった。

三 王昭君が進んで匈奴に嫁ぐと言い出したため、元帝が王昭君を見ると美貌であったため、留めようとしたが、王昭君が陛下は匈奴の信頼を失ってはならないと諫めたため、元帝は王昭君を永安公主に封じて嫁がせた。王昭君にとって異国に行くのは不安であったが、後宮を離れて自由の天地が得られるのは愉快であった。それは宮廷で老いていく心配もなく、将来有意義な生活が送れると信じたからであった。

昭君は、帝を始め文武の高官、多くの后妃嬪御から、萬里行の壮志を讃えられ、匈奴に嫁するのを、國家の爲のやうに、口を揃えて賞められるのを、くすぐったいやうな氣持で耳にして居たが、かの女として、そんな事は一向に嬉しくない。ただ亂れた後宮の束縛から脱して、自由になれるであろう天地を描いて、心竊に楽しんで居た。……かの女の胸に、一點の元帝を思ひ、國家の行末を考へるなどと云ふことはないのだ。……故郷を離れて、遠く異域へ行くことが、心細くもあるが、それは宮女として老い朽ち、偽り多い生活に一生を終ることから考へれば、遙に遙に生き甲斐のある世界であると信じた。……（私は、）當時盲従を強いられて居た女の型を破って、何處までも自意識を押し通さうとした點を、王昭君に見出だしたのである。

平成時代には、藤水名子（1964-現在）の長編小説『王昭君』（1996）<sup>54</sup>は、広い世界を求めて匈奴に嫁いでいき、遊牧生活を享受する健康な王昭君像を描きだしている。

少女は……いつかはこの狭い、窮屈な場所から逃げ出したいと思って いた。目映いほどの王宮での暮らしは、毎日が判で押したように同じことの繰り返しだった。（プロローグ）

行く先が都であろうが、北のはずれの蛮族の国であろうが、大した違いはなかったのである。

## （二 漢帝の憂鬱）

作者の「あとがき」には、作者自身が蒙古高原を訪れて、王昭君が生命を完成させる覚悟と潔白さを感じたと述べている。

史書にはたった一行、その名が記されているにすぎない。漢の元帝の宮女だった王昭君。絶

<sup>52</sup> ペンネーム米田華舫。満鉄社員。『支那語文法研究』（1922、東京：大阪屋号商店）、『絵図玉嬌梨』（1927、東京：支那文献刊行会）、『禪真後史』（1928、東京：支那文献刊行会）等の著作がある。

<sup>53</sup> 『西太后 楊貴妃 他三篇』（1928、東京：支那文献刊行会）に収録。

<sup>54</sup> 1996年、東京：講談社。

世の美女でありながら、地の果ての匈奴へ送られた薄幸のひと、というイメージは、格好の物語の源一種々の画題、詩題となって、後の世までも語り継がれた。……かつて匈奴と呼ばれていた茫漠の土地をはじめて目のあたりにしたとき、ただ言葉もなく、茫然とするばかりだった。……人はただ嘆いてばかりでは過ごせない。……通り一遍の悲劇だけではなく、そこにはきっと、日々の哀歎、生を全うするための覚悟や潔さのようなものがあつたはずだ。

## 九 結論

現代の高等学校の漢文教科書<sup>55</sup>にも『西京雜記』の記述を引いており、王昭君故事は一個の中国故事として広く日本に知られている。

元帝后宮既多、不得常見。乃使画工図形、按図、召幸之。諸宮人皆賂画工、多者十万、少者亦不減五万。独王嬙不肯、遂不得見。匈奴入朝、求美人為閼氏、於是上案図、以昭君行。及去召見、貌為后宮第一。善応対、挙止閑雅。帝悔之、而名籍已定。帝重信於外国、故不復更人。乃窮案其事、画工皆棄市。

近現代の文学では基本的にはこうした記述に基づきながら、細部においては時代に即して比較的自由的な裁量で創作が行われた。すなわち讒言を受けて匈奴に嫁がせられた形象、結婚を強いられて元帝と別れた形象、異国で苦節に耐えた形象、国家のために忠義を尽くした形象、画工に賄賂を贈らなかつた清廉な形象、美貌が魅力的な遊女の形象、後宮を去って荒野に自由を求める形象などを近現代人の視点に立って人物描写に活用しており、中国故事が日本文学の創作に多大な役割を果たしていることを見ることができる。

付記：山口大学後援財団平成 29 年度「A1 教員・研究者及び名誉教授による研究プロジェクトに対する助成事業」『王昭君故事の日本における展開』の研究成果として別に編著『日本王昭君故事研究』（中国語版）を公表した。この編著では和歌、物語などの原文を中国語に翻訳している。併せて参照していただければ幸いである。

---

<sup>55</sup> 『高等学校古典 B 漢文編』（2013、東京：三省堂）、第 14-15 頁等。